

先生先師大地位  
 新婦事性行幽閑にて大慶此事に候。弟大田林庵先年より家督相續候。只今十七八にて候。是も弱輩には候得共、生質宜敷醫學に精出し候。父母共に無之孤にて候へ共、父卜沅家風宜敷、それに習候ておのづから當代世上の浮氣成事少も無之候。其故此方へ參候姉も同敷、殊外かうたうに見え申候。我等家風に相當いたし、妻も殊外悦申事に候。忠三郎と夫婦の間も和し候様子に候間可心易候。卜沅に沅字調候事、如何の故に候哉尋候得共知れ不申候。代々は林庵と申處、父に至候て仔細候て卜沅と稱し候由。只今先祖の右に罷成林庵と申候。元來京都の産にて候。大田家へ養子婿に參候。本姓は北村にて候由。卜沅兄弟數輩只今京に居申候。北村全庵と申者方より、頃日も新婦へ書狀越候。其書中にも舅姑へも孝行の事を、くれぐれ申越候。とかく世俗の習とは、違申と存候て感申事に候。忠三郎は兼て申進候通にて候。何とぞ抱經申度念願にて候。子は大方母に似申物に候間、天幸も候はゞ孫はよく生付可申かと存候。老夫も手足叶不申、逐年老衰候へ共、精神いまだそれ程には衰へ不申候間、孫を見申事にも可有之と存候。内々倭字の書、

先一通り自身に調可申と毎日調候得共、寒氣にて手指別不相叶、中々はか參不申候。當年中は懸り可申と存候。其間に御聞及の通り講談をもいたし、諸生に會得いたさせ度存候に付、色々工夫いたし候得共、自分に今迄氣付不申事をも氣付候故、自分にも得益申儀有之候。をかしき儀ながら頃日心付候て、諸生へ申聞候へば、各感服の由申候間、荒増申進候。近來かしこの地藏に不思議有之、この觀音に利生有之と申候へば、江戸中こぞり候て群集いたし候。今迄は風俗衰へ人心不明に候故、迷候て如此とばかり心得申候。それは不及申事にて候。頃日存候は、是誠の感應にて候。此風俗にて候故、正道にて誠の盛衰は見え不申候。其故誠の不可捨は、たゞ道理にてはかり濟し候て、只今其事實をば見不申候。あしき方にて見候より外は無之候。聖賢の道、又は公儀の御法令、いづれも至極候事、いやと不被申候故面従はいたし候得共、中々思付き不申候。公儀の命令は、それに背候へば罪も中り候得共、上の御威勢にても行はれ不申候。然所にわけも無之事を申候て、人を誣候處に、それは傾心候て群集いたし候。吉凶禍福の事は、人

々信じ申により是ばかりは誠にて候。十人より候へば十人誠心に成候故、其より二十人に成、百人・千人にも成候。世間の凡俗同事の誠にて感動候故、江戸中を動かし申候。然ば聖人の風教世に行はれ候て、人心義理に趣候事、吉凶禍福を信じ申様にさへ候はゞ緩來動和天下を動し申筈にて候。もと虚偽の事にてさへ、誠あれば如此に御座候。況や義理は人心固有の物にて、人毎に此心なきは無之候得共、風俗惡敷候故其方は虚に成、虚誕の事に誠心のこり申にて如此にて候。しかれば世俗愚昧の習とはかり不申候て、誠の感應と見可申事に候。是はあしき方にて、よき方を合點いたすにて候。さればこそ誠意の章にも、小人閑居不善の事を曾子被仰候て、此之謂誠乎中形乎外と被仰候。いかゞ被存候哉。

十一月九日

新 助

一、飛團子の童話

東都來狀の内に申來候狂歌。

植置し田畑を蟲にくらははれて傷根失穂シメタネシホを今ぞしらるゝ  
 是より先童謡あり飛團子の歌といふ。上方筋より發向し、

諸國一同に流布し市正制止之。其歌の内に「しやうねのしつぽ」と云事あり。其意を解するものなし、今解して傷根失穂とす。

一、痘瘡を除く藥湯之方

紅花四錢 牛蒡子四錢 枳殼五錢

陳皮二錢 黑豆 青大豆 各二合 桃木各切口三

右八種、水三升を以て煎じ二升到し小兒を洗ひ候。此藥湯

を以て試ること千人に及で其驗し妙也。八種の内兩大豆

は、布囊に入れて餘藥と同じく煎じ、後に少しく小兒に食せ

しむ。乳母に食せしむるも可也。土屋故相模守殿老中の時、

其領分にして三千人に與へて試るに、一代痘を逃るゝもあ

り。若し痘を病ても至て軽く、一人も死に及ぶ者なしと云。

因て某の年相州より、相公閣下へ傳へたり。公子・公女皆

浴之。今茲世子にも浴之。

一、室鳩巢近情の儀小寺遊路來狀

今月七日榊原殿へ御使に參候に付、駿河臺へ立寄奉拜謁候。寒氣に成候て御痛は彌御不出來に御覺被成候得共、御氣宇御飲饌は少も御替無之旨被仰候。御痛の儀兼て被仰聞